

北九州市立大学
文学部紀要

第90号

— 目 次 —

梅花宴の万葉歌碑を巡る ～令和に寄す～

文／写真 堀尾香代子 …………… 110

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2020

梅花宴の万葉歌碑を巡る 〈令和に寄す〉

文／写真 堀尾 香代子

一 はじめに

二〇一九年五月一日、第一二六代徳仁天皇の御即位とともに「令和」の時代が幕を開けた。『日本書紀』に見える最初の元号である「大化」(六四五年)から数えて二四八番目の元号となる。出典となった『万葉集』巻五「梅花歌卅二首」の序文は、「天平二年(七三〇年)正月十三日(太陽暦の二月八日頃)」に大宰帥大伴旅人(六六五年〜七三一年、当時六六歳)の館で開かれた花宴で「園梅」を題に詠まれた三十二首の歌に附された一七文字から成る四六駢儷体の漢文である¹。梅花宴は、中国東晋の書家王羲之(三〇七年頃〜三六五年頃)が、会稽内史(会稽郡の長官)であった三五三年の上巳節(三月三日)に浙江省会稽山近くの蘭亭²に孫綽や謝安をはじめとする文人や友人一族など四十一名を招き催した「流觴曲水の宴」の詩宴に倣い催された新年の歌宴といわれ、西海道の九国二島諸国の国司など十一名と大宰府官人ら二十名(笠沙弥を含む)の計三十一名を招いて催された。梅花宴で詠まれた歌には、作者の氏の

部が省かれている歌や、官職名の記載がない歌などもあるため、全ての参席者が明確にはなっていないが、概ね次の人々と比定されている³。

【大宰府】紀男人(大弑)、小野老(少弑)、粟田上^カ(少弑)、沙弥满誓(官名記載なし)、大伴百代(大監)、阿氏奥島(少監)、土師百村(少監)、史氏大原(大典)、山口若麻呂(少典)、丹氏麻呂(大判事)、張福子(薬師)、荒氏稻布(神司)、小野淑奈麻呂(大令史)、田氏肥人(少令史)、高氏義通(薬師)、磯氏法麻呂(陰陽師)、志紀大道(算師)、土師水道(官名記載なし)、小野国堅(官名記載なし)、小野田守(官名記載なし)

【筑前】山上憶良(筑前守)、佐伯直子首(筑前介)、田辺真上(筑前目)、門部石足(筑前掾)

【筑後】葛井大成(筑後守)

【豊後】大伴三依^カ(豊後守)

【薩摩】高氏海人(薩摩目)

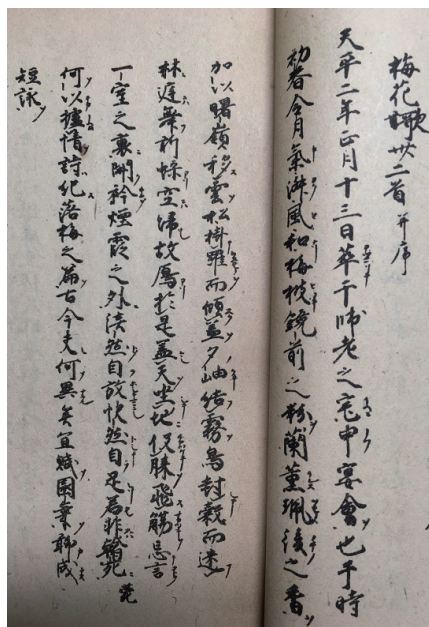
【大隅】榎氏鉢麻呂(大隅目)

【老岐】板茂安麻呂(老岐守)、村氏彼方(老岐目)

(1)

【対馬】高向村主老（対馬目）

これに主催者である大伴旅人（大宰師）を加えた計三十二名が梅花宴に参席し歌を披露している。



梅花歌廿二首の序
西本願寺本萬葉集（お茶の水図書館蔵）

六朝風の漢文で書かれた序文は、江戸前期の国学者契沖が『万葉代匠記 初稿本』において、「義之か蘭亭記の開端に、永和九年歳在癸丑^ニ、暮春之初會^ニ于會稽^ノ山陰^ノ之蘭亭^一。脩^ニせん^トセリ禊事^ヲ也。この筆法にならへりとみゆ。⁴」と、蘭亭の詩宴で競作された二十七編の漢詩を編んだ『蘭亭集』の序文⁵を下敷きに書かれていることを指摘している。この他にも王勃・駱賓王らにより初唐に作られた詩序の文体・表現・用字に基づくところが多い。「令和」の直接の典拠となった「初春令月、気淑風和」の部分も、同じく『万葉代匠記 初稿本』で、『文選』巻十五の賦篇に載る張衡（七八年〜一三九年）の「帰田賦」に見える「仲

春令月、時和氣清」との関連性が指摘されており、序文全体は複数の漢籍を踏まえ、それらを背景に作成されている。

序文と歌宴で詠まれた三十二首の歌は、同年四月六日に平城京にいたる旅人の友人吉田宜⁶に送られている。七月十日付の宜の返書には「…兼奉^ニ垂示^一、梅苑芳席、群英摘^レ藻、松浦玉潭、仙媛贈^レ答、類^ニ杏壇各言之作^一、疑^ニ衡阜税駕之篇^一。耽読吟諷、威謝欽怡。…」と、旅人から送られた歌々を耽読吟諷しようこと、感謝する心などが記されており、併せて「諸人の梅花の歌に和^ニ奉る一首」と題した次の歌を旅人に届けている⁷。

① 後れ居て長恋せずはみ園生の梅の花にもならましものを
（巻五、八六四番）

また、都から遠く離れた大宰府にある旅人を思い「君を思ふこと未だ尽きず、重ねて題す歌二首」と題する次の二首も併せて贈っている。

② はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は
（巻五、八六六番）

③ 君が行き日長くなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびに
けり（巻五、八六七番）

現在大宰府市内には四十四基（二十八首）の万葉歌碑が設置されており、このうち梅花歌の歌碑は十一基（七首）存在する。順にたずねてみたい。

二 旅人邸と八一五番歌の歌碑

梅花宴の最初の八首（八一五番歌～八二二番歌）は、五位以上の来賓七名と宴の主催者である大伴旅人の詠歌で、おおよそ位階の順に歌が並んでいる。ただし、参席者のなかで最も位階が高い旅人（正三位）は主催者であるため、その詠歌は来賓七名の詠歌の次に置かれている。この後に六位以下の詠歌が続く。

梅花宴の舞台となった旅人邸の場所は定かでない、「坂本八幡宮一带」「月山東地区官衙跡」「大宰府条坊榎社・客館周辺」の三箇所が推定されている。このうちの坂本八幡宮（大宰府市坂本三丁目）を蔵司方面へ少し下った沿道脇（大宰府政庁跡西側）に梅と桜の木が植栽された原野があり、その木立の中に「正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ（巻五、八一五番）」の歌碑が建つ。高さ二・二m、幅一mの自然石の形を活かした青々とした立派な伊予青石が台石の上に据えられており、背後には梅の木が植えてある。この歌碑は平成十七年十月の建立で、揮毛者は一九九五年～二〇〇七年まで大宰府市長を務めた佐藤善郎氏（元福岡市教育長）である。濃淡の色の変化が美しい凹凸のある石の表面に墨入れをしていない端正な楷書の文字が彫られている。以下、歌碑の表面の写真の後に銘文と原文（銘文が原文の場合は漢字仮名交じりの読み下し文）を銘文と同様の体裁の分ち書きで記す。



815 番歌の歌碑

〈銘文〉

正月立ち春の来たらば

大式紀卿

かくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ

〈原文〉

武都紀多知波流能吉多良婆

可久斯許曾鳥梅乎岐都多努之岐乎倍米

大式紀卿

八一五番歌は歌宴第一番目の歌で、作者は神亀五年（七二八年）に大宰大式（大宰府次官・正五位上相当官）となった紀男人とされる。参席者のうち主催者の旅人に次ぐ高官である男人はこの宴の主賓であり、最初に開宴の挨拶とも言うべき歌とし

て、宮廷での儀礼に倣い、宮中で新年の宴に謡われた賀歌「新
たしき年の始めにかくしこそ千年を兼ねて楽しきをへめ（『琴
歌譜』正月元日、片降しの歌）などの形式を踏まえた冒頭歌ら
しい歌を披露した。同様の形式の歌は『続日本紀』や『催馬楽』
『古今和歌集』などにもみえる。

④新しき年の始にかくしこそ供奉らめ万代までに（『続日本
紀』聖武天皇、天平十四年正月十六日の条）

⑤新しき年の始めにや かくしこそ はれかくしこそ
仕へまつらめや 万代までに あはれ そこよしや 万
代までに（『催馬楽』呂歌、新年、二七）

⑥新しき年の始めにかくしこそ千年をかねてたのしきを積
め（『古今集』一
〇六九番、大歌
所御歌、大直毘
の歌）

④は聖武天皇の天
平十四年正月十六日
に内裏の正殿で行わ
れた踏歌の節会にと
もなう宴の席で、六
位以下の官人らが琴
を弾き謡った歌であ
る。「新年に当ってこ



坂本八幡宮

のように歌い舞い万代
までも仕えたい¹⁰と、
新年のよろこびと御代
の永遠性を寿いでいる。

⑤は「新年」と題する
『催馬楽』で、『催馬楽
略譜』では「此ノ哥ハ
正月中ニ用フベシ、専
ラ祝哥ナリ」と注する。
また、⑥は『古今和歌
集』のなかでも、儀式
や神事などで演奏する
音楽の歌詞を集めた大歌所御歌に収載されている歌であること
から、この形式の歌々は奈良時代から平安時代にかけて、宮中
の新年の節会に伴う宴や神事の際などに謡われた賀歌と考えら
れる。

坂本八幡宮は「土地神・産土神として崇拝されている神社で
応神天皇を御祭神（坂本八幡宮縁起）」とする。『福岡縣神社誌
中巻』（一九四四年、財団法人大日本神祇会福岡県支部編・発
行）の「由緒」の項には、創建は「天文、弘治の頃勧請と云ふ。」
とある。小さな境内には大伴旅人の詠んだ「我が岡にさ雄鹿来
鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿（巻八、一五四一番）」の
歌碑も建っている。



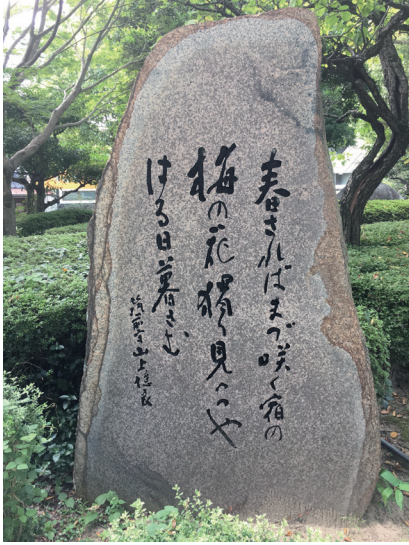
815番歌の歌碑が立つ梅林の遠景

梅花宴の万葉歌碑を巡る
～令和に寄す～

かりに坂本八幡宮一带に旅人邸があつたならば、八一五番歌の歌碑が建つ梅林のあたり（前頁下段の写真近辺）で梅花宴が催されたことになろうか。

三 八一八番歌の歌碑

筑前国司山上憶良が詠んだ歌宴第四番目の歌「春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ（巻五、八一八番）」の歌碑は、県道三十五号線の筑紫野古賀線（政庁通り）沿いに建つ太宰府市役所（太宰府市民遺産に認定されている）公益財団法人太宰府メモリアルパーク（太宰府市大字大佐野字野口）の二カ所に建つ。



818 番歌の歌碑

〈銘文〉

春さればまづ咲く宿の
梅の花 ひとり見つつや
はる日暮らさむ

筑前守山上憶良

〈原文〉

はるさればまづさくやどの
波流佐礼婆麻豆佐久耶登能
うめのはなひとりみつつや
鳥梅能波奈比等利美都々夜
はるひくらさむ
波流比久良佐武

筑前守山上大夫

上段の歌碑は昭和六十年五月に太宰府市役所の前庭に建立されたものである。この歌碑は福岡地区の複数のロータリークラブが合同で財団法人古都大宰府を守る会（現・公益財団法人古都大宰府保存協会）へ寄贈し、同協会が設置者となって建立された¹⁾。高さ二・二m、幅一・四mのよく磨かれた扁平な石の表面に書家前崎南嶂^{まきみなたけ}氏の揮毫が刻まれている。

前崎南嶂氏は福岡県筑紫郡的那珂町（現在の福岡市博多区の一部）生まれの書家で、福岡県美術協会理事、福岡書芸院会長などを歴任した人物である。また、大野城市に居を構え、南畑小学校教頭、那珂小学校校長を務めた教育者でもある¹²⁾。

この歌の作者である山上憶良は、大宝二年（七〇二年）に四十二歳で第七次遣唐少録として粟田真人に従って唐に渡り、帰

朝後は伯耆守を経て、養老五年（七二一年）に紀男人らとともに東宮首皇子（のちの聖武天皇）に侍講する。筑前守として赴任したのは神龜三年（七二六年）頃から天平四年（七三二年）頃までの晩年で、同じ頃（神龜四年（七二七年）、もしくは神龜五年（七二八年））に大宰師として下向した四歳年下の上官大伴旅人と親交を深め、万葉筑紫歌壇を開花させることとなる。

梅は早春の花で百花に先駆けて咲き、春の到来を告げることから、「百花魁」「花魁」「花の兄」「春告げ草」「自知春」などの異称をもつ。憶良の詠んだ歌の上三句「春さればまづ咲くやどの梅の花」はこのような発想を背景に旅人邸の梅の花を讃えている。次例のように同様の発想を背景にする万葉歌は他にもいくつか見える。

⑦今のごと心を常に思へらばまづ咲く花の地に落ちめやも
（卷八、一六五三番、具犬養娘子）

⑧十二月には沫雪降ると知らぬかも梅の花咲く含めらずし
て（卷八、一六四八番、紀小鹿女郎）

梅が春に咲く花のうち最も早く開花するという発想は古代中国詩に多く見られるもので、たとえば唐代初期に成立した中国最古の類書の一つである『芸文類聚』（六二四年）には、「早梅」「梅友」「梅花落」「採桑」と題する次のような詩や賦が収載されている。

⑨梅花特早 偏能識春（梁、簡文帝「梅友賦」卷八十六、菓部上、梅）

⑩臈月正月早驚春 衆花未發梅花新（隋、江總「梅花落」卷八十六、菓部上、梅）

⑪迎春故早發 獨自不疑寒（陳、謝夔「早梅」、卷八十六、菓部上、梅）

⑫春色映空來 先發院邊梅（梁、簡文帝「採桑」、八十八巻、木部上、桑）

唐代以前の詩文や歌賦などあらゆる文献を大量に引用したこの類書は唐代四大類書の一つで、現存最古の完本類書でもある。日本にも早くから伝わり、奈良時代の人々によく読まれ大いに影響を与えた。奈良時代に成立した日本最古の漢詩集『懷風藻』（七五一年）に載る大伴旅人や境部王の詠んだ漢詩にも同様の発想をもつ漢詩が見える。

⑬新年寒氣尽。上月濟光輕。送雪梅花笑。含霞竹葉清。
歌是飛塵曲。絃即激流聲。欲知今日賞。咸有不暇情。

（五〇、宴長王宅、從四位上治部卿境部王）
⑭寛政情既遠。迪古道維新。穆穆四門客。濟濟三徳人。
梅雪乱残岸。煙霞接早春。共遊聖主沢。同賀擊壤仁。

（四四、初春侍宴、從二位大納言大伴宿禰旅人）
万葉人たちは中国漢詩文の世界からこのような発想を学び、漢詩や和歌の製作に積極的に取り込んでいったのである。

下二句では「ひとり見つつや春日暮らさむ」とその梅の花をひとり寂しく見ながら春の長い一日を暮らすことだろうかと思嘆する。『万葉集』には「ひとり」を詠み込む歌が七十三首見

梅花宴の万葉歌碑を巡る
～令和に寄す～

えるが¹³、これらは次例に見るように一般に愛しい妻や夫、恋人などと離れて（もしくは死別して）「ひとり」あることを嘆く際に用いられる。

⑮ うつせみの世やも二行くなにすとか妹に逢はずて我がひとり寝む（巻四、七三三番、大伴家持）

⑯ 泊瀬風かく吹く夕は何時までか衣片敷き我がひとり寝む（巻十、二二六一番）

⑰ 秋萩を散らす長雨の降る頃はひとり起き居て恋ふる夜そ多き（巻十、二二六二番）

⑱ ひひとり居て恋ふれば苦し玉だすきかけず忘れむ事計りもが（巻十二、二八九八番）

⑲ ひとりのみ見れば恋しみ神奈備の山のもみち葉手折り来り君（巻十三、三三二四番）

旅人は梅花宴の二年前に大宰府の地で都から同行した妻大伴郎女を亡くしており、親交の厚い憶良の詠んだこの歌は旅人の境遇や心境とも重なり、その心を慰めたことであろう。

下記の歌碑は平成二十七年に太宰府メモリアルパーク圓通閣に建立された同歌の歌碑である。



818 番歌の歌碑

〈銘文〉

春去ればまづ咲く宿の梅の花

ひとり見つつや春日暮らさむ

筑前守山上大夫

〈原文〉

波流佐礼婆麻豆佐久耶登能鳥梅能波奈

比等利美都々夜波流比久良佐武

筑前守山上大夫

四 八二二番歌の歌碑

宴の主催者である旅人が詠んだ「我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも（巻五、八二二番）」の歌碑は、太宰府天満宮境内（太宰府市宰府四丁目）の曲水の庭前と太宰府メモリアルパークの二カ所に存在する¹⁴。

次頁の歌碑は昭和五十二年に太宰府ロータリークラブの創立を記念して奉納された書家宮崎正嗣氏の筆が刻まれた天満宮境内の碑である。



822 番歌の歌碑

〈銘文〉

わが苑に梅乃花

散る久方の天より雪

の流れくるかも

大伴旅人

〈原文〉

和何則能尔宇米能波奈

知流比佐可多能阿米欲里由吉

能那何列久流加母

主人

揮毛者の宮崎正嗣氏は福岡県山門郡にあった瀬高町（現在のみやま市）生まれの書家で、筑紫美術協会創立メンバーの一人

である。福岡県美術協会理事、九州かな書作家協会副会長などを歴任した人で、「平安朝時代の優雅なかな字に、特に、小野道風の作品に心ひかれた¹⁵⁾」という。一方、昭和十四年から警察官として奉職しており、昭和四十五年筑紫野警察署長（警視正）で退官するまで福岡県下の各警察に務めた人物でもある¹⁶⁾。

凹凸の表情のある花崗岩の表面には、流麗で温雅な筆跡で歌が三行に分ち書きされており、裏面には「昭和五十二年十一月嘉日建立 太宰府ロータリークラブ創立記念 大伴旅人卿歌宮崎正嗣敬書¹⁷⁾」と彫られている。この歌碑は太宰府の北東部に聳える宝満山の自然石を使用している¹⁸⁾。宝満山(竈門山)は、筑紫野市と太宰府市にまたがる山で、古くは「御笠山」と称されていた霊峰である。天智天皇の御代に大宰府鎮護のため竈門神社が創建されて以来、我が国の歴史上重要な国家的祭祀が継承されてきた霊山として平成二十五年に鳥海山、富士山に次いで国史跡に指定された。歌碑の大きさは、高さ二・七m、幅一・六mで、真横には九州国立博物館へと登る長大なエスカレーター(アクセストンネル)が建つ。

作者の大伴旅人は、六七二年の壬申の乱において大海人皇子(のちの天武天皇)方で活躍した大伴安麻呂の第一子で、母は巨勢郎女である。大伴氏は摂津国住吉郡を本拠地とする豪族で、代々武をもって朝廷に仕えた大和朝廷を代表する武門の名門氏族である。旅人はその大伴氏の氏上である。旅人の九州への赴任は養老四年(七二〇年)に征隼人持節大將軍として薩摩に下

向して以来二回目となる。『万葉集』に収載されている七十余首の歌の大部分は大宰師在任以降に詠んだものである。

現在大宰府周辺の白梅は三月上旬頃に満開を迎え、宴のあった二月上旬は梅花の散る頃ではなかったであろうが、笠沙弥(造)筑紫観世音寺別当・満誓の詠んだ前歌「青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし(巻五、八二一番)」の「散りぬともよし」を受ける形で、雪が舞い落ちるかと思紛うばかりに舞い散る白梅の花を詠む。

海外交通の要衝であった大宰府は、大陸からの文物文化輸入の窓口で、先進文化の受容地であった。中国原産の渡来植物である梅は、初め大陸からの玄関口である大宰府に伝えられ、その後奈良の都平城京へともたらされる。『万葉集』には「梅」を詠んだ歌が一一八首と、植物の中で「萩」の一四一首に次いで多く詠まれているが、いずれも白梅である¹⁹。そのうち「梅」と「雪」とを詠み合わせた歌は三十一首で、「梅」と他素材との詠み合わせの中で最多を数える²⁰。これらの歌の中には当該歌のように白梅を「雪」に見立てた次のような歌々も散見される。

⑲妹が家に雪かも降ると見るまでにここだも紛ふ梅の花か

も(巻五、八四四番、小野国堅)

⑳我が岡に盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがへつるかも

(巻八、一六四〇番、大伴旅人)

㉑我がやどの冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも

(巻八、一六四五番、巨勢宿奈麻呂)

㉒梅の花枝にか散ると見るまでに風に乱れて雪を降り来る

(巻八、一六四七番、忌部黒麻呂)

㉓山高み降り来る雪を梅の花散りかも来ると思ひつるかも

(巻十、一八四一番)

㉔み園生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ(巻十七、三九〇六番、大伴書持)

また『懷風藻』には「梅」を詠み込んだ漢詩が十五首あるが、先の⑬⑭や次の⑳のように「雪」と取り合わせた漢詩も見える。

㉕帝里浮春色。上林開景華。芳梅含雪散。嫩柳帶風斜。…(七五、

初春於左僕射長王宅讌、正六位上但馬守百濟公和麻呂)

同様の趣向は『芸文類聚』にも見え、この二素材の取り合わせを含め、「梅」を詠んだ歌には中国文学の影響が色濃い。

㉖楊柳條青樓上輕 梅花色白雪中明(隋、江總「梅花落」卷

八十六、東部上、梅)

㉗絶訝梅花晚 爭來雪裏窺(梁、簡文帝「雪裏覓梅花」卷

八十六、東部上、梅)

㉘春近寒雖轉 梅舒雪尚飄(陳、陰鏗「雪裏覓梅花」卷

八十六、東部上、梅)

㉙驚時最是梅 銜霜當路發 映雪擬寒開枝(梁、何遜「早梅」

卷八十六、東部上、梅)

梅花歌三十二首中散る梅を詠む歌は十一首にのぼるが、これらは序文の末尾「詩紀落梅之篇、古今夫何異矣。宜賦園梅、聊成短詠。」の呼び掛けと照応する。「落梅之篇」は古代中国で辺

境の兵士たちが正月に咲く梅を見て家族や故郷を思う望郷の歌謡で、六朝から唐代にかけて楽府詩「梅花落」へと受け継がれる。「大君の遠の朝廷『万葉集』」にある大宰府の官人らは自らの境遇を重ね故郷を思いつつ、「落梅（散る梅）」を愛でる歌を詠じたのであろう。

境内には菅原道真の伝説で有名な「飛梅」（本殿前左近。品種・和名は色玉垣）をはじめ一九七種約六千本の梅が植えられており、歌碑の前の曲水の庭では毎年梅花が満開を迎える三月第一日曜日に「曲水の宴」が催されている。

下記の歌碑は平成二十七年に太宰府メモリアルパーク圓通閣に建てられた同歌の歌碑で

下記の歌碑は平成二十七年に太宰府メモリアルパーク圓通閣に建てられた同歌の歌碑で



太宰府天満宮本殿の左近の飛梅



822 番歌の歌碑

ある。

〈銘文〉

我が園に梅の花散る

久方の天より雪の流れ来るかも

大宰師大伴卿

〈原文〉

和何則能尔宇米能波奈知流

比佐可多能阿米欲里由吉能那何列久流加母

主人

五 八二三番歌の歌碑

旅人の歌の上二句「我が園に梅の花散る」を受け詠まれた大伴百代の「梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ（巻五、八二三番）」の歌碑は、県道三十一号線沿いにある太宰府歴史スポーツ公園（太宰府市吉松四丁目）と太宰府メモリアルパークの二カ所の他、市外では筑紫野市大宇山口の山神ダム展望広場にも存在する。次頁は平成元年に太宰府市によって歴史スポーツ公園（展望広場下南東側）に建立された書家御田義清氏の揮毫による歌碑である

梅花宴の万葉歌碑を巡る
～令和に寄す～



823 番歌の歌碑

〈銘文〉

梅の花

散らくはいづく

しかすかに

この城の山に

雪は降りつゝ

大監大伴百代

〈原文〉

鳥梅能波奈

知良久波伊豆久

志可須我尔

許能紀能夜麻尔

由企波布理都々

大監伴氏百代

高さは一・三m、幅一・一mで、銘文は優雅な筆跡の行書体で歌が五行に分ち書きされている。

御田義清氏は太宰府天満宮権宮司であった人で、天満宮に奉職し書家として活躍するかたわら、博多の郷土芸能として名高い「博多仁和加²¹」を歳時記的にまとめた『ひとくちにわか博多歳時記くらだこ』（一九五八年、飛梅樹畔水月庵）を著すなど、地域の芸能の維持と継承に積極的に寄与した人物としても知られる。生前は天満宮境内の案内や御守、お札授与所の表示、祭典や祭事関係の横断幕、賞状など多くのものが義清氏により揮毛されていたという²²。

この歌の作者大伴百

代は大宰府の大監（大宰府の判官で三等官・正六位下相当官）で、『万葉集』に当該歌を含め七首の歌を残している。歌中の「城の山」は大宰府の北方に聳える四王寺山の大野山のこと、筑前国司山上憶良が、大宰府で病没した旅人の妻大伴郎女の死を悼み献



都府楼から臨む四王寺山

上した「大野山霧立ち渡る我が嘆くおきその風に霧立ち渡る（巻五、七九九番）」にもみえる山である²³。大宰府都府楼の背後になだらかに広がる四王寺山は大野山・岩屋山・水瓶山・大原山の総称で、太宰府市と大野城市と宇美町の境界にまたがる丘陵である。最も高い大野山の標高は四一〇mで、山頂には白村江の戦いで日本軍が唐と新羅の連合軍に大敗を喫したのちの天智天皇四年（六六五年）に、新羅と唐の侵攻に備えて大野城が築かれたため「大城山・城の山」ともいわれる。

大野城は、天智天皇三年（六六四年）に国防体制構築の一環として太宰府市・大野城市・春日市にまたがり築かれた全長一・二kmの水城に続いて造営された対外防衛施設で、頂上全域を囲むように尾根に沿って全長八kmに及ぶ版築土塁の城壁を廻らせ、谷部を石垣や石塁などで塞いで圍繞した日本最大の古代山城（朝鮮式山城）である。

自然地形を生かして築城されたこの城砦は、大宰府の南方を護る基肆城（筑紫野市と基山町にまたがる山岳城塞。大宰府から西南約八kmのところに位置する）とともに、百済の亡命貴族（築城家）の指導のもと築造されたことが『日本書紀』に見える。

⑳達率答林春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野と椽、二城を築かしむ。（天智天皇四年八月条）

現在も城門跡や土塁、石垣、倉庫の礎石群などの遺構が残る。



百間石垣

旅人の妻亡き後、大宰府に下向した旅人の異母妹である坂上郎女は、大宰府から帰京した翌年に奈良の都平城京で大宰府を懐かしみこの山を詠んでいる。

㉑今もかも大城の山にほととぎす鳴きとよむらむ我なければども（巻八、一四七四番、大伴坂上郎女）

また、上国である筑後守の葛井大成（従五位下相当官）は、旅人が帰京した後の寂しさを「城の山道」に寄せて詠んでいる。



大野城宇美口城門礎石

梅花宴の万葉歌碑を巡る
～令和に寄す～

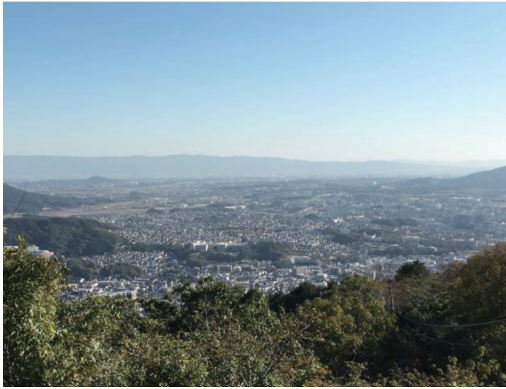
③今よりは城の山道はさぶしけむ我がが通はむと思ひしものを
(巻四、五七六番、葛井大成)

「城の山道」は基肆城の東に位置する「両国峠を通る古代の
駅路で、大宰府から筑後・肥前の国府への要路であった。²⁴」
とされる。百済からの渡来系名門氏族の出身である葛井大成は
梅花宴でも来賓として上席に坐し、歌宴第六番目の歌「梅の花
今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり(巻五、八二〇
番)」を詠んでいる。任国の筑後の国府から大宰府へはこの要
路を通っていたのであろう。この他にも作者未詳ではあるが、
「大城山」を詠む次の歌も見える。

④いちしろくしぐれの雨は降らなくに大城の山は色付きに
けり(巻十、二二九七番)

かつて旅人や憶良を
はじめ大宰府にあつた
万葉人が眺め、様々な
思いを馳せたこの山の
山頂からは、遠く筑紫
平野や玄界灘が一望で
きる。

下段は平成二十七年
に太宰府メモリアルパ
ーク圓通閣に建てられ
た同歌の歌碑である。



尾花地区土壘から臨む筑紫平野



823 番歌の歌碑

〈銘文〉

梅の花散らくはいづく

しかすがにこの城の山に雪は降りつつ

大監伴氏百代

〈原文〉

烏梅能波奈知良久波伊豆久

志可須我尔許能紀能夜麻尔由企波布理都と

大監伴氏百代

六 八二九番歌の歌碑

張福子が詠んだ歌宴第十五番目の歌「梅の花咲きて散りなほ
桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや(巻五、八二九番)」の
歌碑は、大宰府万葉会創立二十周年を記念して、平成二十九年
一月に同会により太宰府市総合体育館(太宰府市大字向佐野)

の敷地内に建立された。



829 番歌の歌碑

〈銘文〉

梅花歌
 烏梅能波奈 佐企弓知理奈婆
 佐久良婆那
 都伎弓佐久倍久奈利弓阿良受也
 薬師張氏福子

〈読み下し文〉

梅の花 咲きて散りなば
 桜花
 継ぎて咲くべくなりにてあらずや
 薬師張氏福子

宝満山（竈門山）

を源とし博多湾へと

注ぐ御笠川を背に建

つこの歌碑は、自然

石の形を活かした高

さ一・八m、幅一・

二mのよく磨かれた

偏平の石の表面に八二九番歌と作者名が一字一音の万葉仮名で

刻まれており、その裏面には揮毫者についての解説などが彫ら

れている。裏面の解説によれば揮毫者は、万葉会講師、協力者、

大宰府中学校・大宰府小学校・水城小学校・大宰府特別支援学

校の生徒、万葉朗唱者など八十五人で、一字一音の万葉仮名、

もしくはその振り仮名を世伊古撰一人一字ずつ八十五人で書し

たとある。

この歌の作者である張福子は奈良朝初期の大宰府の薬師（菓

寮のことを司る医師・方士。正八位上相当官）で、奈良時代後

半に成立した『藤氏家伝』下巻の「藤原武智麻呂伝」（僧延慶

七六〇年）の神龜六年（七二九年）頃の記述に、方士の吉田宜

や、文雅に秀でた葛井大成などととも聖武天皇の治政を補佐

した人物として名があげられている渡来系帰化人である。

歌宴の上席の最後に坐す僧籍の満誓が詠んだ「青柳梅との

花を折かざし飲みての後は散りぬともよし（巻五、八二一番）」



829 番歌の歌碑裏面

の花」が咲き散ったならば、「桜花」が続いて咲きそうになっているのではないかと詠じる。集中に「桜」を詠み込んだ歌は四十一首存在するが²⁵、このうち中国渡来の植物である「梅」と日本固有の植物である「桜」とを取り合わせた歌は当該歌を含め二首が見えるのみである。もう一首は次の歌である。

㊦ うぐひすの木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時かたまけぬ
(巻十、一八五四番)

㊦は「梅」と「桜の花」の他に「うぐひす」も取り合わせているが、発想そのものは当該歌と同様で、春の到来を告げる梅の花に続き、春の盛りを彩る「桜の花」が咲くさまを詠むことによつて、春のよろこびの尽きない心を表現している。

七 八三〇番歌の歌碑

太宰府天満宮境内の大鼓橋を渡り、宝物殿や文書館の建つ東神苑の方向へ進むと菖蒲池が広がる。この池の北畔に歌宴第十六番目の歌となる「万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし(巻五、八三〇番)」の歌が刻まれた歌碑が立つ。高さ五m、幅〇・七mの大きな歌碑が立派な台石の上に据えられている。昭和三十四年十月に天満宮の三土会(第三土曜日に参拝する講)によつて建立されたものである。



830 番歌の歌碑

〈銘文〉

筑前介佐氏子首

よろつよにとしはきふともうめのはな

たゆることなくさきわたるへし

〈原文〉

万世得之波岐布得母鳥梅能波奈

多由流己等奈久佐吉和多留倍子

筑前介佐氏子首

揮毫者は、大野城市(旧・筑紫郡大野村)生まれの書家古賀井卿氏(二八九一年～一九八二年)である。一首全体が典麗な平仮名で書かれており、歌碑の裏面には、「昭和三十四年歳

在己亥十月三十一日 三土會建之 天平二年正月十三日大宰師
大伴卿宅にて詠める梅花歌三十二首の中 古賀井卿書」と刻ま
れている。



830 番歌の歌碑の裏面

古賀井卿氏は筑紫美術協会の初代副会長を務めた人で、太宰
府市の観世音寺にアトリエ「吐月叢」を構えた同協会初代会長
の木彫家富永朝堂氏（二八九七年〜一九八七年）、太宰府市三
条に居を構えた同協会副会長の日本画家小野茂明氏（一八九七
年〜一九九四年）とともに「三仙人」と呼ばれた芸術家である。
井卿氏の米寿の際に書かれた「米寿を迎えて―『神苑寓感』
の略歴²⁶、ならびに太宰府天満宮文化研究所の聞き取りによれ
ば、井卿氏は一九五一年〜一九五三年に太宰府天満宮境内にあ
った飛梅会館（太宰府天満宮幼稚園の隣にあった宿泊施設）に
寓居し、太宰府天満宮一〇五〇年大祭にも奉職している。また、

一九六二年〜一九七八
年までの約十六年間
は境内の東神苑（文
書館の右奥あたり）
の庵に住んでいたと
いう²⁷。

井卿氏が寓居して
いた庵は現在には残ら
ないが、太宰府天満
宮境内やその周辺に
は、井卿氏の書や木
彫刻字を見ることが
できる。天満宮本殿前の左近に立つ御神木「飛梅」の案内立札
（左下写真）の麗筆な木彫刻字も井卿氏の揮毫である。

この他、太宰府天満宮の参道に店舗を構える御菓子処
「梅園」の店舗の幅と同じ横幅の重さ一〇〇kgの大きな看板の
木彫刻字や²⁸、鳥居の
程近くに店舗を構える
美術工芸品店「小野東
風軒」の看板なども井
卿氏の揮毫である。「梅
園」の建つ大町地区は
江戸時代には宰府宿と



古賀井卿氏の庵があった文書館右奥



本殿左近の飛梅の立札

梅花宴の万葉歌碑を巡る
～令和に寄す～

して賑わいをみせていたあたりで、「梅園」の建つ場所にも「泉屋」という屋号をもつ土佐藩系の旅籠屋が建っており、幕末藩士の坂本龍馬や伊藤博文らが宿泊して



いる。近隣には安政の大獄で幕吏の追及を受け薩摩に赴いた尊王攘夷派の月照上人（清水寺成就院の住職）や西郷隆盛が身を隠した薩摩藩系の旅籠屋「松屋」、高杉晋作が宿泊した長州藩系の旅籠屋「大野屋」、幕府系の旅籠屋「日田屋」など多数の旅籠屋が軒を連ねていた。現在も「松屋」や「大野屋（現・まめや）」「日田屋（現・大宰府石ころ館）」など当時の姿を残す建物も少なくない。井卿氏は「梅園」のご家族とも交流が深く、店舗の看板以外にも、幼少より親しんでこられた店主のご息女の御結婚のお祝いに赤松の木彫刻字を贈っている。



ご息女によれば、井卿氏は常々「文字は誰にでも読めるように書かんといかん」と話していたそうで、そのことば通り井卿

氏の揮毫による八三〇番歌の万葉歌碑も大変読みやすい典麗な文字で書かれている。

この歌の作者である佐氏子首は、上国である筑前国の介（次官・従六位上相当官）の佐伯直子首と推定されている。

「梅」と「桜」に春のよろこびの尽きない心を託した前歌を受けつつも、紀男人の詠んだ冒頭歌「正月立ち春の来らばかしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ（巻五、八一五番）」に照応する内容の歌となっている。男人の詠んだ賀歌は「正月になって春が来たならば、毎年こうやって梅の花を招き寄せて、楽しみの限りを尽くそう」と、梅花と饗宴の永續性を詠み祝意を表明しているが、八一三番歌も同様に、旅人邸の梅の花が「万代」までも絶えることなく咲き続けていくであろうと詠うことで、旅人の栄華の永遠性を寿ぐ。このような趣旨の歌は梅花歌のなかにもう一首見える。

③⑨年のはに春の来らばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ（巻五、八三三番、神司荒氏稲布）

③⑩は男人の詠んだ八一五番歌の初句「正月立ち」が「年のはに、四句目「梅を招きつつ」が「梅をかざして」、結句「楽しき終へめ」が「楽しく飲まめ」となっている点が異なるのみである。ともに主賓である男人の冒頭歌を意識しつつも、③⑩は『琴歌譜』『催馬楽』『古今和歌集』の大歌所御歌などに載る新年を寿ぐ賀歌の形式を踏まえて詠まれていることがわかる。

八 八三九番歌の歌碑

八三八番歌から八四二番歌までの五首は目（官事の記録や文案の起草、公文の抄録・読申などを掌る四等官）たちの詠んだ歌々が展開される。このうちの一首「春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る（巻五、八三九番）」の歌碑が、県道三十一号線沿いの太宰府歴史スポーツ公園と太宰府メモリアルパークの二カ所に建つ。

左は平成元年一月に太宰府市によって建立された歴史スポーツ公園敷地内（展望広場下東側）の歌碑である。



839 番歌の歌碑

〈銘文〉

春の野に

霧立ちわたり

降る雪と

人の見るまで

梅の花散る

筑前目田氏真上

〈原文〉

波流能努尔

紀理多知和多利

布流由岐得

比得能美流麻提

烏梅能波奈知流

筑前目田氏真上

歌碑の高さは二m、幅は二mで、銘文は流麗な筆跡で歌が五行に分ち書きされている。揮毛者は八三番歌と同じ太宰府天満宮権宮司の御田義清氏で、裏面には「平成元年一月吉日 太宰府天満宮 御田義清書」と刻まれている。歴史スポーツ公園内には、この他にも御田義清氏の揮毛による万葉歌碑が八基（梅花歌を含め計十基）設置されている。

この歌の作者である田氏真上は上国である筑前国の目（従八位下相当官）で、「諸陵寮解（正院文書）」の天平十七年十月

二十日の「申請月料事」に「従六位上行大允田邊史真上²⁹」の署名が見える田辺真上と推定されている。

歌の結句の「梅の花散る」は、中国である大隈の目榎氏鉢麻呂の詠んだ前歌「梅の花散り紛ひたる岡辺にはうぐひす鳴くも春かたまけて（巻五、八三八番）」の「梅の花散り紛ひたる」を受ける形で、降る雪と見紛うまで舞い散る梅の花を詠む。発想としては、旅人が詠んだ「我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも（巻五、八二二番）」と同様の趣向である。

上二句の「春の野に霧立ち渡り」は、算師志氏大道の詠んだ前々歌「春の野に鳴くやうぐひすなつけむと我が家の園に梅が花咲く（巻五、八三七番）」の初句「春の野に」を意識しよう。万葉の時代においてははまだ春は霞、秋は霧という固定観念はないが、「霧」や「霧る（四段動詞）」「霧らす（霧る）の他動詞形）」「霧らふ（霧る）＋継続の助動詞「ふ」）など、霧や霧が立ち込める意を表す語と「秋」とを詠み合わせた歌は集中に十二首確認されるのに対し、「春」と詠み合わせた歌は当該歌を含め四首が見えるにとどまり、上代においてもすでに「秋」との取り合わせに偏る傾向はある。

- ③⑦：天皇の 神の尊の 大宮は ことと聞けども 大殿は
ことと言へども 春草の しげく生ひたる 霞立ち
春日の霧れる ももしきの 大宮所 見れば悲しも（巻
一、二九番、柿本人麻呂）

③⑧ 春山の霧に迷へるうぐひすも我にまさりて物思はめや（巻

十、一八九二番）

③⑦は「春日」と「霧る」、③⑧は「春山」と「霧」とが共起する例である。③⑦は「近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌」と題詞のある歌で、廢墟となった旧都近江大津宮やその宮殿に春の草が生い繁り、霞が立ち春の日がかすんでいる光景を「見れば悲しも」と詠嘆している。③⑧は「春山の霧に迷っているうぐいす」と「思い悩む自己」を引き比べることで、自己の物思いの深さを表現している。人の嘆きの息に擬されることの多い「霧」は、「春」との取り合わせにおいてさえも、それに類する心情や感情と重ね合わせて用いられている。むしろ「霧」にあえて明るいいメージの「春」を取り合わせることで、煩慮・憂患する心などを浮き彫りにする効果を狙っているかにも見える。一方「霧」と「雪」とを取り合わせた歌は集中に当該歌を含め九首が見える。

- ③⑨ うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす
鳴くも（巻八、一四四一番、大伴家持）
④⑩ たな霧らし雪も降らぬか梅の花咲かぬが代にそへてだに
見む（巻八、一六四二番、安倍奥道）
④⑪ 天霧らし雪も降らぬかいちしろくこのいつ柴に降らまく
を見む（巻八、一六四三番、若桜部君足）
④⑫ うちなびく春さり来ればしかすがに天雲霧らし雪は降り
つつ（巻十、一八三二番）

③⑨～④⑫ に見るように、いずれも雪が降り空がかき曇る様子

を「(うち・たな・天)霧らす」「天雲霧らふ」と表現している。とりわけ⑩は当該歌と同様に「霧」と「雪」の他「梅の花」も詠み合わせており、霧が立ち込め雪が降る光景をせめて咲かない「梅の花」の代わりと思つて眺めたいと詠じる。霧に包まれた降雪の光景を白梅の落花の光景に見立てる点でも、当該歌や旅人の詠んだ八二二番歌と類似の発想をもつ。

下記は平成二十七年に太宰府メモリアルパーク圓通閣に建てられた同歌の歌碑である。



839 番歌の歌碑

〈銘文〉

春の野に霧立ちわたり

降る雪と人の見るまで梅の花散る

筑前目田氏真上

〈原文〉

波流能努尔紀理多知和多利

布流由岐得比得能美流麻提烏梅能波奈知流

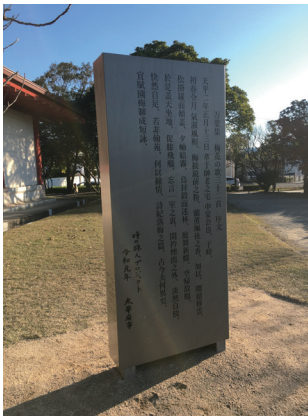
筑前目田氏真上

九 梅花宴の万葉歌碑の所在地図

かつて大陸からの先進文化で彩られ、高度な文雅を形成した万葉筑紫歌壇を生んだ「天下之一都会」『続日本紀』称徳天皇神護景雲三年十月甲辰条。大宰府には往時の建造物こそ少ないが、点在する史跡や遺跡が古代の繁栄を今に伝える。この地は、日本の歴史文化を語る重要な地として二〇一五年に太宰府市の地域の歴史を語るストーリー『古代日本の「西の都」〜東アジアとの交流拠点〜』が日本遺産にも認定されている。

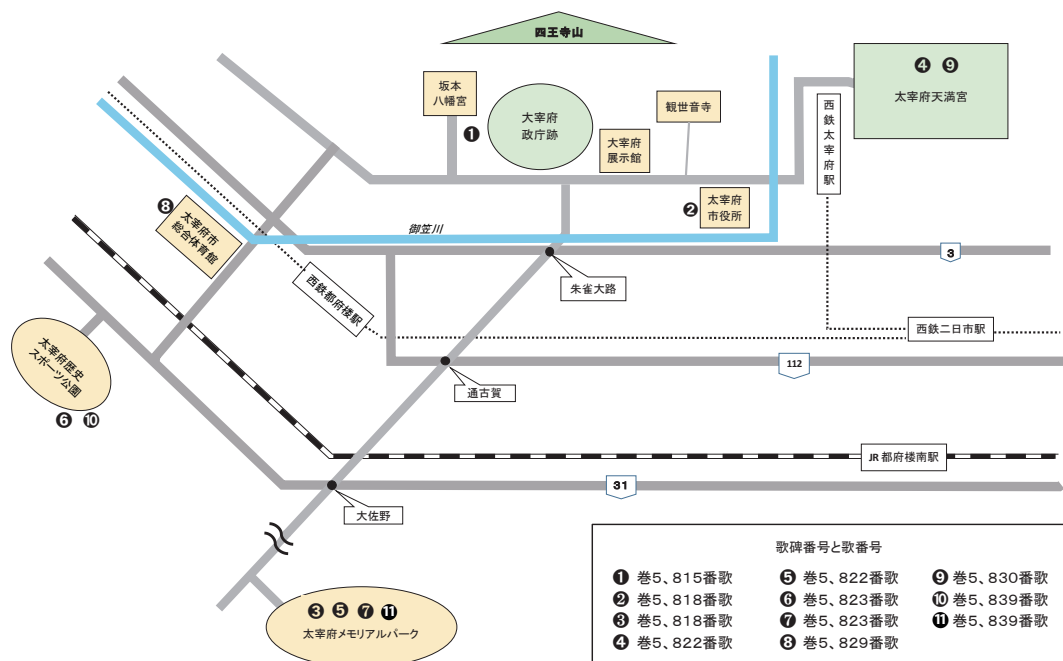
また、歌碑ではないが、本稿を執筆中の二〇一九年十一月四日に「令和」を記念して、太宰府市により「梅花の歌三十一首」の序文を刻んだチタン製のモニュメントが政庁通りに建つ大宰府展示館（太宰府市観世音寺四丁目）の玄関横に設置された³⁰。

次頁上段は太宰府市内に建つ梅花歌の歌碑十一基（七首）の所在地を示した地図である。かつて旅人や憶良が見た霧立つ四王子山を眺め、都府楼に通つた小道を歩きながら歌碑を訪ね、古代万葉の息吹を感じていただければ幸いである。



モニュメント

梅花宴の万葉歌碑を巡る
～令和に寄す～



〈注〉

1 本稿では行政的な表記に従い、古代律令時代の役所やその遺跡・官名などは「大宰府」、地名や天満宮などは「太宰府」と表記する。

2 蘭亭は中国浙江省紹興市南西約十三kmに位置する蘭渚山らんしよざんの麓にあった亭ちん。

3 「梅花歌卅二首」の作者は五位以上の来賓（七名）と、六位以下の陪席者（二十四名）とを区別し、後者の中で役職をもつ者については中国風に氏を一字で記している。参席者の氏名の表記、及び（ ）内の官名は小学館日本古典文学全集『萬葉集』を参考にした。

4 『契沖全集 第三卷』（久松潜一校訂者代表、一九七四年、岩波書店）六十一頁。

5 『蘭亭序』は王羲之が書いた六朝時代を代表する散文の一つ。二十八行、三二四字から成る行書の草稿の筆跡は古今の名筆として名高い。真蹟は現存しないが、唐代の初めに虞世南、欧阳詢、褚遂良らが臨書した模本や、搨書人による搨本が伝わり、日本でも古来より親しまれてきた。

6 吉田連宜は、百濟から帰化した医術家で、僧名を恵俊というが、文武四年（七〇〇年）に勅命により還俗している。天平二年当時は六十歳前後であったと推定される。

7 以下、各作品の本文については次の資料より引用する。
『萬葉集』『催馬楽』『古今和歌集』（以上、日本古典文学全

- 集)、『日本書紀』(新編日本古典文学全集)、『続日本紀』(新日本古典文学大系)、『琴歌譜』、『校註国歌大系 第一巻』一九七六年、講談社)、『懐風藻』(『懐風藻全注釈』辰巳正明、二〇一二年、笠間書院)、『芸文類聚』(唐) 歐陽詢撰、汪紹楹校、一九六五年、中華書房局)。ただし、引用に際しては私に表記を改めたところもある。
- 8 この他、太宰府市立国分小学校(太宰府市国分二丁目)にも、一基の歌碑が存在するが、これは平成六年三月に第十二回卒業生一同の奇贈によって同校に設置された学内者向けの歌碑であるため、今回の調査対象からは除外した。かりにこの歌碑を含めるならば、太宰府市内の万葉歌碑は四十五基(二十八首)、梅花歌の歌碑は十二基(七首)存在することとなる。
- 9 原文、及び読み下し文は西本願寺本を底本に校訂を加えた小学館日本古典文学全集『萬葉集』を用いるが、引用に際しては私に表記を改めたところもある。
- 10 新日本古典文学大系『続日本紀』巻二、四〇三頁の注。
- 11 『財団法人古都大宰府を守る会設立二十周年記念 古都大宰府―保存への道―』(一九九四年、(財)古都大宰府保存協会・旧(財)古都大宰府を守る会・西日本新聞社編)一一六頁、及び、古都大宰府保存協会の田中健一氏の説明を踏まえた。
- 12 『昭和 문화史』(一九八二年、全地方人事調査会)、『福岡県庁を飾る「書」作品集』(福岡文化連盟、一九八二年、梓書院)
- 13 『萬葉集電子総索引(CD-ROM版)』(古典索引刊行会編、二〇〇一年、塙書房)に拠る。
- 14 この他同歌の歌碑は太宰府市立国分小学校にも存在する。詳細は注8参照。
- 15 『昭和 문화史』(一九八二年、全地方人事調査会)二八二頁。注15に同じ。
- 16 以下、裏面の刻字の改行箇所は、スペースをもって示すこととする。
- 17 『太宰府天満宮 神苑石碑巡り』(二〇〇一年、太宰府天満宮文化研究所編、太宰府顕彰会)七十七頁。
- 18 紅梅が日本の文献に明記されるのは平安時代以降のことである。
- 19 「万葉集における梅の歌考」『熊本女子大学国文研究』第二十六号(重留妙子、一九八〇年、熊本女子大学国文談話会)の調査によれば、「梅」とともに詠み合わされた素材は、「雪」が三十一首と最も多く、「鶯」十三首、「柳」十二首、「山」七首、「風」六首、「月」五首と続く。
- 20 「博多仁和加」は福岡市指定無形民俗文化財として指定された長い歴史と伝統をもつ民族芸能で、「にわか面」と言われる半面を着け、日常生活や世相を反映した題材などについて博多弁を用いて会話し、その最後に面白い落ちをつけて話をまとめる風刺とユーモアに包まれた即興笑劇である。

- 22 太宰府天満宮文化研究所の聞き取りによる。
- 23 七九九番歌の歌碑は、国分天満宮（太宰府市国分四丁目）境内と太宰府メモリアルパークに建つ。
- 24 小学館日本古典文学全集『萬葉集（一）』の付録「地名一覽」四五三頁。
- 25 内訳は「桜花」二十首、「桜の花」十三首、「桜」四首、「山桜花」二首、「山桜戸」一首である。
- 26 「古賀狂輔氏略歴」『とびうめ』第三十六号（一九七八年三月二十五日、太宰府天満宮社務所）十八頁。
- 27 庵のあった場所は文献資料では確認できなかったため、太宰府文化研究所で聞き取りを行っていただいた。その聞き取りでは、文書館左の如水の井戸側に住んでいたと記憶している人も一名あった。
- 28 筆者が本稿を執筆中の期間は、「梅園」の店舗が修繕工事中で看板を撮影することができなかったため、許可をいただき、店舗所有の写真を掲載させていただいた。
- 29 『大日本古文書 編年之二』（一九〇一年、東京大学史料編纂所編、東京大学出版会）四七一頁。
- 30 このモニュメントは、『新元号「令和」記念「時の旅人プロジェクト」』〜時空を超えて1300年の一環として、ふるさと納税による仕組みを使ったクラウドファンディングにより寄付者を募り製作されたもので、裏面には寄付者の氏名が刻印されている。

【謝辞】

本稿の執筆にあたり、公益財団法人古都太宰府保存協会学芸員の田中健一氏と同協会スタッフ、太宰府天満宮文化研究所学芸員の清水蓉子氏と同研究所スタッフに資料のご提供、ならびに確認作業で大変お世話になりました。また、「梅園」の方々には、写真撮影や聞き取り調査に快く応じていただきました。記して御礼申し上げます。

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 90 March 2020

CONTENTS

Manyo Monument of ume flower-viewing party

Kayoko HORIO 110

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2 0 2 0